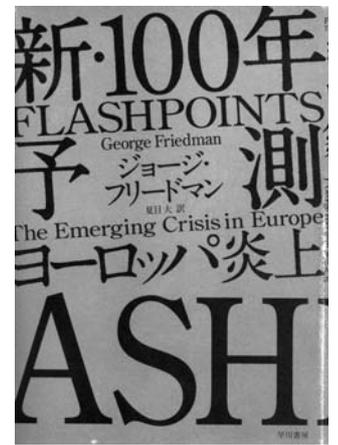


# SPACE JAPAN BOOK REVIEW

衛星通信関係者が見た

Reviewer: 編集特別顧問 植田剛夫



ジョージ・フリードマン著、夏目大訳：“新・100年予測・ヨーロッパ炎上”、早川書房、2015

(原本) George Friedman: “FLASHPOINTS・The Emerging Crisis in Europe”, Doubleday, 2015

本書は、本誌のこの欄で過去2回にわたって紹介された（参考文献[1]、[3]参照）、フリードマン著「100年予測」シリーズの第3作である。フリードマンは、米国で「影のCIA」とまで呼ばれるインテリジェンス企業のCEOで、前2作ではユニークかつ大胆な予測が注目された。

本書は日本版で「新・100年予測」と銘打っているのですが、当然前2作の続編と予想するのだが、実は内容は予想に反しており、ヨーロッパの現代史を著者の独自の見方で鋭く分析し、大きな危機の発生を控えめながら予測した、ある意味では物騒な内容といえる。前2作のように、安全保障がらみでの「宇宙」の役割が特記されているわけでもないのですが、本誌に取り上げることにはやや躊躇されたのだが、著者によるヨーロッパ現代史が実にコンパクトに生き生きと描かれているため、今後このシリーズでのユニークな「予測」が続くことを期待し、それらへのつなぎの意義もこめて、本書についても取り上げさせて頂くこととした。

裕福なユダヤ人だったらしい著者の家族は、奇跡的にホロコーストを逃れて生き延びるが、ソ連衛星国のハンガリーで今度は秘密警察に狙われるところとなり、著者が生後6か月だった1949年に、一家4人で当時の共産国ハンガリーを脱出する。著者の父は金と、東西対立に乗じて米国のスパイになって米政府に取り入ることで、家族をまず逃がして米国へ無事送り込むあたりの描写が、ヨーロッパの中世から現代までの本質を分析しようとする本書の、興味深い導入部となっている。

次には中世のヨーロッパで、ポルトガルのエンリケ航海王子に始まった世界探検が、当初は富への欲望、地政学、イスラムとの対抗、科学の発達、それに未知への探求心を原動力としていたのが、その後のコルテスなどのように残忍、無慈悲に植民地をひろげてゆく方向に転じて、ヨーロッパによる世界征服に至る過程が述べられる。

15世紀から16世紀にかけてヨーロッパ人に確立された三つの自己確信、すなわち「自分たちの生きる世界が宇宙の中心」「ヨーロッパが世界の中心」「教会がヨーロッパの中心」という信念が、コロンブス、ルター、それにコペルニクスによって次々に覆され、ヨーロッパ人の知の世界がばらばらになった。その後も、ヨーロッパは世界の隅々にまで進出し、殆どの国を支配下においているように見えたのだが、先に破壊された自己確信を接合するためには、美しく魅力的なナショナリズムが必要とされ、科学技術と国民国家への道が追及された結果、諸国の発展はなつたものの、ナショナリズムに目覚めた国家間で、他国への敵意と恐怖への道を開いてしまった、と著者は解説する。

1900年の時点でドイツが急速に台頭したことが、前述の国家間の脅威感をあおり、科学技術の発達によって、大量殺戮可能な武器の大量生産が可能になったこととあいまって、1914年8月にヨーロッパは突如として大量殺戮の場となり、以後二度の大戦で1945年までに1億人の死者と無数の負傷者を出すこととなった。

戦後アメリカの力のうえに推進されてきたヨーロッパ統合だが、設立から好調だったEUが、2008年の2つのできごと、すなわちロシアによるジョージア（グルジア）危機によってNATOの無力化が明らかになり、一方リーマン・ブラザーズに端を発した世界金融危機が、ヨーロッパの団結を壊したことで大きくつまづいてしまった、と著者は分析する。

ジョージアとロシアの紛争、1990年代のバルカン半島での紛争や、コーカサスでの紛争について、我々日本人は殆ど詳細を承知していないので、これらの戦いがヨーロッパの今後の姿を如何に暗示しているか、すなわち過去に経験した被害者意識や憎しみがいかに強く生きており、バルカンやコーカサスで起こることが、ヨーロッパの古くからの伝統「同じ場所で同じような紛争が繰り返される」によって、今後いかに再現されるのか、著者の分析には教えられるばかりである。

以後、ドイツの自国の国益とEU最強国の立場との両面のジレンマ、旧ソ連の崩壊を「20世紀最大の地政学的惨事」と呼ぶプーチンの支配するロシアの西への再拡張の欲望、フランスのEU内での地位低下、ベルギーが消滅の可能性、EUの実質4分裂等が次々と語られるのだが、終章「終わりに」の最後の結文が印象的である。今後のヨーロッパに対し、著者が全く楽観的に見ていないことがわかるし、ヨーロッパの現状の至るところに、本書の原題である「引火点」が潜んでいることを知らされる。

「人間が戦争をするのは、愚かだからでも、過去に学んでいないからでもない。戦争がいかに悲惨なものかは誰も知っており、したいと望む人間はいない。戦争をするのはその必要に迫られるからだ。戦争をするよう現実に強制されるのである。ヨーロッパ人はもちろん人間なので、他の地域の人間と同様、あるいは過去の彼等と同様、いつでも悲惨な戦争を選択せざるを得ない状況に追い込まれる可能性はある。戦争か平和か、その選択を迫られる時は来る。ヨーロッパ人は過去に何度も戦争を選択してきた。今後も選択する時はあるだろう。まだ何も終わってはいない。人間にとって重要なことは、いつまでも終わることではないのである。」

我が国の最近の安全保障法制がらみで、「安全保障環境の変化」という決まり文句がしきりに使われ、「国民への説明不足」というコメントも聞かれるのだが、東アジアでの日本と中国（あるいは北朝鮮も）の関係を、本書のレベル（国民が納得できるレベル）まで具体的な目つき深く分析、予測を行った著作なり報告書なりが、何故見当たらないのだろうか。

#### 参考文献

- [1] 飯田尚志：SPACE JAPAN BOOK REVIEW “フリードマン「100年予測」”, SPACE JAPAN REVIEW No.73, April/May 2011
- [2] ジョージ・フリードマン、櫻井祐子訳：“100年予測・世界最強のインテリジェンス企業が示す未来覇権地図”、早川書房、2009（現在はハヤカワ・ノンフィクション文庫「100年予測」）
- [3] 植田剛夫：SPACE JAPAN BOOK REVIEW “フリードマン「激動予測」”、SPACE JAPAN REVIEW No.74, June/July 2011
- [4] ジョージ・フリードマン、櫻井祐子訳：“激動予測・「影のCIAが明かす近未来パワーバランス”、早川書房、2011（現在はハヤカワ・ノンフィクション文庫「続・100年予測」）